

平成 28 年度

国指定史跡真壁城跡発掘調査現地説明会資料

平成 28 年 12 月 3 日（土）
桜川市教育委員会生涯学習課

1. 史跡真壁城跡とは

国指定日：平成 6 年 10 月 28 日

指定面積：約 12.5 万平方メートル

年代：室町時代～安土桃山時代（15 世紀中ごろ～1602 年廃城）

特徴：平城、本丸を中心に周囲を二の丸、中城、外曲輪が囲む形

歴史：平安時代末期、真壁郡に入封した常陸平氏一族の平長幹を初代とする真壁氏の居城。真壁氏は、おおむね旧真壁町・大和村・明野町付近を領地とした国人領主（国衆）。慶長七年（1602）に佐竹氏に従い秋田へ移封するまで当地を治めていました。

真壁城の城下町が現在の重要伝統的建造物群保存地区（重伝建）である「真壁の町並み」の基礎になっています。

2. 平成 28 年度調査概要

調査面積：約 1,000 平方メートル（継続調査部含む）

調査場所：中城地区（いわゆる三の丸に当たる）中心部の北西域。

特徴：中城庭園北部

調査期間：平成 28 年 8 月～12 月

調査主体：桜川市教育委員会生涯学習課

3. 中城庭園の過去の調査成果概要

・中城地区の中心部に作られた池と周囲に建てられた建物からなる庭園。庭園全体の面積は 7,000～8,000 平方メートルに及ぶと思われます。

・池は南池（池 1）、北池（池 3）と、それを結ぶ水路状の池（池 2）の大きく 3 つに分けられる。水深は 30～50 c m 程度と浅く、複雑な形をしているのが特徴。場所により白や黒の石を底面に貼って装飾しています。

大きな景石は残されていませんが、一部石を据えていたと考えられる痕跡がありました。

・池の周辺には、大型の建物 3 棟を始めとしていくつかの建物の痕跡が確認できました。大型の建物は南池を望む場所にあり、城主が宴会等を行った場所（主殿・会所）と思われ、周囲からは宴会に使った素焼きの小皿（かわらけ）

が大量に出土しています。また、池の上に張り出すように作られた建物は能舞台の可能性ががあります。

小型の建物のいくつかは周辺から茶道具が多数出土しており、茶室であったと思われます。

・出土した遺物のほとんどは「かわらけ」です。これは宴会のたびに使い捨てることが多く、建物の周辺に多数まとまって出土した場所が確認されています。他に、高級品である中国産の青磁（盤、酒会壺、花瓶、碗）や白磁（四耳壺）、染付（碗・皿）、天目茶碗などや、国産の天目茶碗、茶臼などが出土しています。

・池を中心とする庭園が作られた時期は、大きく分けて 3 時期あり、おおむね
Ⅰ期：永禄～元亀年間ごろ（1558～1573 年）：当主 真壁久幹
Ⅱ期：天正年間ごろ（1573～1592 年）：当主 真壁氏幹
Ⅲ期：文禄年間～慶長七年（1592～1602 年）：当主 真壁房幹
と考えています。時代ごとに作り変えが見られます。

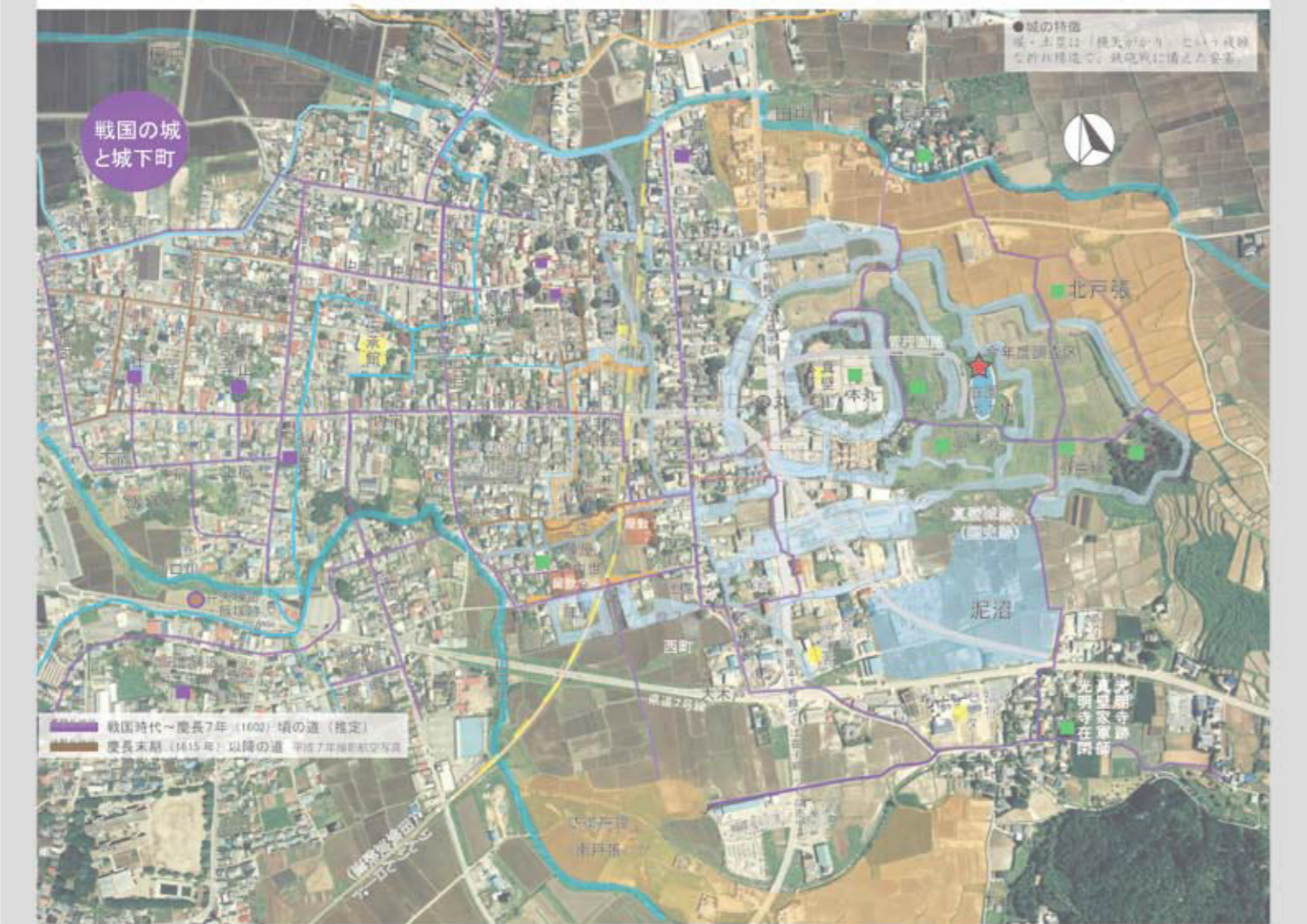
4. 今年度の発掘調査成果について

・前年度に引き続き、北池（池 3）の調査を行いました。

・北池の大きさをほぼ確定。東西約 27m、南北約 17m。中心部に東西約 15m、南北約 8m の大きな中島があります。池の水深は浅く、30～50 c m 程度。南池（池 1）や水路状の池（池 2）に比べて地形的に低い場所にあり、池と池の間には堰などがあったと考えられます。

・北池から北西へ延びる大きな溝跡を確認しました。溝は上幅 3 m、下幅 50 c m ほどの薬研堀に近いような形状で、深さは 1.5～1.8m あります。池から流れてきた水を排水するためのものと考えられますが、当初の想定よりかなり大きく深い溝で、排水だけではなく水溜の機能も持っていたと思われます。溝の端部は調査区域外へ延びており、確認できませんでしたが、西のⅡの堀へ繋がるものと考えられ、次年度調査予定です。また、池と溝との接続部は比高差が 1m ほどあり、滝のようになっています。あるいは接続部に板などで仕切り（堰）が設けられていたのかもしれない。

・出土した遺物は多くが「かわらけ」ですが、青磁の碗や盤（大皿）などの高級品や、染付碗・皿など、中国産磁器の破片が数点出土しています。これらは実用品でもありますが、領主の威信を見せつけるための道具でもあり、特に青磁盤は部屋に調度品として飾られていたものと考えられます。また、天目茶碗や茶臼などの茶道具も複数出土しています。こうした遺物の多くは、排水路を埋め戻した土の上の方から出土しており、庭園が使われなくなった（≒壊した）あとに捨てられたものと思われます。



調査の様子



池の排水路



池に映る筑波山